



本当の中国が見えてくる 日本人妻の歯ざしり ～中国人の別の名前～

最近会社に「ラフ」という名前の男性が入ってきた。外国人ではない、中国人だ。本名は別にある。10年くらい前からだろうか、中国では英語名を名乗る人が増えてきた。芸名やハンドルネーム、源氏名などのように場面に応じて使い分けるのではなく、みなさんどうやら職場や友人間、SNS上でもその英語名を使っているようなのだ。そもそもは外資系企業から始まったと思われる。「外国人の上司が、自分が呼びやすいように英語の名前をつけてくれた」というのを聞いたことがある。それが国内企業にも広がり、今では自分の英語名を持っている人は少なくない。ほとんどの人は、自分で気に入った名前を付けているらしい。それが若者ばかりではなく60代ぐらいの人もいて、英語名の浸透ぶりがうかがえる。

女性では、リリー、エマ、ソフィア…、男性では、レオ、ボブ、マイク…といった名前が人気の上位にあるらしい。私の周りでも女性はエミリー、ミシェル、男性はシモンという名前の人がおり、実名を知らないで私もそう呼んでいる。社員の中にはすでにジェニーという女性がいる、みんな英語名を呼ぶことに抵抗がないのか、ラフは入ってきた日からラフと呼ばれている。その他の英語名のない人は、昔ながらの「小〇」「老〇」という呼び方で呼び合っていて、そのギャップがまた面白い。

日本でも多くなったが、もともと本名が西洋風の人もある。夫の甥の前の奥さんは、リナ（麗娜）といった。他にもリリー（莉莉）、マリ（媽媽）、男性ではウェイリー（維里）、ジェイ（傑伊）などの名前は珍しくないらしい。

「中国には日本の『〇〇さん』みたいな、老若男女使える都合のいい呼び方が無いからねえ、英語名があると案外便利なんだよ」と夫。なんでも、入社時の若くて経験がないときは「小〇」とみんな普通に呼ぶが、10年経って歳もとって、後輩も入って来ると、「小〇」では都合が悪くなる。今までの「小〇」

を、「大〇」や「老〇」に改めるべきだろうが、慣れた呼び方を変えるのは簡単ではない。もし英語名をもっているなら、それを呼ぶ方がスマートだし、ずっと使えて便利なのだぞうだ。そういえば、工場の蘇さんは還暦になったが、入社時からずっと「小蘇」と呼ばれている。三年前に入った40代の張さんは、自分より年上の蘇さんを「小蘇」とは呼び難く、「蘇師傅」と呼んでいる。「師傅」には先生や師匠の意味があり、彼女なりに気を遣っているのだ。

ある人から、「知り合いに『幸之』という名前の人がいるよ。日本風じゃない？」と聞いたことがある。彼の親が日本風の名前を付けようとしたのかどうかは不明だが、あと10年も経てば、中国には今以上に「〇〇風」の名前が多くなるのかもしれない。

親が、子どもの幸せを願って付けてくれる名前はどうな名前でもありがたいが、自分が将来に希望をもって、自分で名前を考えるのもいいのではないだろうか。かくいう私も高校生の頃、クレア・グリーンという名前を自分に付けて楽しんでいったことがある。あと20歳若かったら「クレア」と呼ばれていたのかと想像するとなんだか…私には英語名を名乗る度胸はないな。

写真

待ちに待った春がきました。上海人にとって春の味は、何といっても「ナスナ」です。

①日本人が雑草だと思っている、あのナスナです。ナスナは「苜蓿（シツサイ）」と呼ばれ、上海人が大好きな春の野菜なのです。

②うちの庭のナスナ。花が咲いたら食べるには遅いらしいです。

③近所のスーパーの野菜コーナー。この女性を買おうとしている野菜がナスナです。

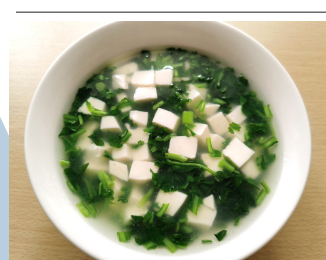
④一年中食べたい人には、冷凍ナスナもあります。下湯でしてカットされているので便利です。主に餃子やワンタンの具（餡）に使います。（写真右上）



⑤ 冷凍食品の餃子やワンタンも、上海ではナスナ（苜蓿 餡）が人気。

⑥ 冷凍の「豚肉ナスナ餡」ワンタンを買ってみました。中身は鮮やかな緑色。

⑦ 豆腐スープに入れるのも一般的です。肝心の味ですが、最初の印象は「野草の味」。癖のある味で、今でも大好きではありませんが、春の味ではありません。



profile さねみつ じゅんこ
岡山県出身 上海市在住 家族：夫、犬1匹、猫2匹。
1989年 大学卒業後、教育・福祉関係の仕事に就く。1997年 中国人の夫と結婚。
1998年 夫の赴任で上海に引っ越し、上海済経大学で中国語を学ぶ。
2000年 日本語教師の仕事に就く。
2005年 上海同济大学大学院入学。
2008年 卒業。
2008-2011年 病気治療のため日本に帰国
2011年 上海に戻り、夫の経営する会社の工場勤務 今に至る